

新纂
校訂

隱元全集

第一卷

新纂
校訂

隱元全集

第二卷

新纂
校訂

隱元全集

第三卷

新纂
校訂

隱元全集

第四卷

新纂
校訂

隱元全集

第五卷

新纂
校訂

隱元全集

第六卷

新纂
校訂

隱元全集

第七卷

新纂
校訂

隱元全集

第八卷

新纂
校訂

隱元全集

第九卷

新纂
校訂

隱元全集

第十卷

新纂
校訂

隱元全集

附錄

昭和五十四年十月二十一日

後水尾天皇 三百年大遠誨記念

黃檗山 萬福寺

はしがき

明治以來、佛教史學は長足の進歩を遂げてきたが、こと黄檗宗に關する限り、學者の研究は寥々たるものである。その理由はいろいろ考えられるだろうが、黄檗宗の史料が各所に散在していて研究者の目に觸れにくかったということが、少なくとも理由の一つにあげられると思う。

黄檗宗僧侶の語録類は豫想外に多く、吉永雪堂氏の編集した『黄檗著述目録』に掲載されているものだけでも、數百種類の多きに達している。臨濟・曹洞兩宗に比べて著しくおくられている黄檗宗の研究を進ませるには、これらの語録類をすべて網羅した黄檗宗全書の出版が望ましいが、それは遠い將來にゆずるとしても、宗祖隱元の全集に次いで木菴・即非・高泉の全集ぐらゐは、早急に世に出す必要があると思う。本全集の出版を契機として、黄檗宗寺院の方々に考えておいていただきたいものである。

隱元の在世中及び寂後間もないころの法子・法孫らは、隱元の語録・年譜類を編集し、自費を投じ、あるいは有力な外護者に費用を募って次々と開版し世に送り出していた。その種類は、増補本・又増補本を含めると、自分の目に觸れたものだけでも語録類四十三種類・年譜四種類になる。當時の法子・法孫らは、本師・師翁の語録・年譜類を編集し開版することを自分らの果たすべき當然の義務と考えると共に、隱元延いては黄檗宗の宣傳にも役立てようとしたのだろうが、當時のことを想見すると、「壯觀」の一語に盡きる。

ところで、當時開版された隱元の語録類を今日から見ると、内容上重複する部分が非常に多く、しかも重複してい

る部分を互に照合すると、省畧したり、語句を変えたりした箇所がかなり多い。隠元全集を編集する場合、江戸時代に開版された語録類をそのまま収録することは、至極簡単なやり方であり、それなりにまた意味のあることだが、内容の上から言うと、甚だ雑然たるものにならざるを得ない。

そこで自分は、今から數年前のことであるが、目に觸れた隠元の語録類から幾種類かの底本を選び、底本に洩れているものは底本以外のもので補い、底本に收められているものについては、底本以外のいかなる語録類に收められているか、底本と底本以外のものとの間には語句の上にどのような違いがあるか、それらの點を克明に指摘して、新たに編集し直してみようと思ひ立った。

編集し直すには、かなりの時間と根氣が必要である。いつからその作業に取りかかるかと思つてゐる時、たまたま玉村竹二氏の五山文學新集出版完成祝賀會の招きをうけて會に出席し、玉村氏が老大な全集の原稿をすべて手書されたことを知つて驚嘆し、敬服した。玉村氏が『五山文學新集』の編集に注がれた勞苦に比べれば、自分の意圖している編集など物の數でないと思ひ、會が終わつて歸宅する途中、編集の作業を早速開始する腹を決めた。作業を開始するにあたってまず定めた方針は、書寫する時間をできるだけ省くため、電子コピーを最大限に利用することである。隠元の年譜四種類を互に照合すると共に、本文と年譜との關係を明らかにする方針をも新たにたてた。かようにして餘暇のすべてを編集の作業にあて、約二年間で一應作業を終えたのである。

編集に取り組んでいる當時、自分の編集しているものが將來出版されるとは毛頭思つていなかった。自分の編集したものが、今回『新纂校訂 隠元全集』と題して出版されることになったのは、筑波大學助教授野口鐵郎先生が出版を勧められ、御關係の深い開明書院に直接連絡して下さった結果である。先生から連絡をうけて拙宅に來られた同書院の

取締役編集部長佐藤克彦氏は、影印本にして限定出版することを即座に約束され、一か月後に出版契約書を取りかわすことになった。

自分に課せられた出版関係の作業のうちで、最も多くの時間を費したのは索引の作成である。そのため豫定した発行の時期がおくれ、開明書院に御迷惑をおかけしたことと思う。ひるがえって、作業を進めている間に自分がいつも懸念していたのは、全集の出版によって開明書院に損失を與える結果にならないかということである。この點については、黄檗山萬福寺の宗務總長浅井善應師から、後水尾法皇三百年御遠忌を記念して出版に協賛すると申され、萬福寺塔頭綠樹院の村瀬玄妙師、黄檗文華殿主管林雪光先生、愛知縣常滑市龍雲寺の山本千秋師、東京都池袋洞雲寺の玉川泰客師をはじめ、東京都黄檗宗寺院の方々からも力強い支援の御言葉があり、それらに支えられて出版関係の作業を進めていった。なおその間、大槻幹郎先生からは、新発見の語録・壽章のゼロックス化、頭註に關係ある寫眞資料の提供その他、終始協力していただいた。

本全集を編集して思うのは、今は故人になられた山本悦心・吉永雪堂兩氏の黄檗史料蒐集に盡された業績である。兩氏は生前、私財と精力を傾けて黄檗史料の蒐集に當たられた。悦心師の藏書は愛知縣常滑市の龍雲寺に保存されており、雪堂氏の藏書の大部分は、現在黄檗山萬福寺の黄檗文華殿に吉永文庫本として收藏されている。自分に隱元全集を編集することができたのは、兩氏の舊藏書の閱覽・撮影を龍雲寺の山本千秋師・黄檗文華殿主管林先生より許可されたからである。もっとも、全集を編集するにあたっては、兩氏の舊藏書のほかに、國立公文書館所藏の『黄檗隱元禪師語錄』（二卷）、駒澤大學圖書館所藏の『雲濤三集』（八卷・増補本）と『黄檗隱元禪師年譜』（又増補本）、東京都池袋洞雲寺所藏の『黄檗和尚太和集』（寛文二年版）、近年大槻先生によって発見された三重縣菰野町見性寺（妙

心寺派) 所藏の『隠元和尚普門艸錄』と『黃檗和尚壽章附別言』(龍谷大學圖書館所藏本と異なる)を使用する必要

があった。悦心・雪堂兩氏の長年にわたる努力にかかわらず、これらの版本を蒐集することができなかったという一事によっても、黃檗史料の蒐集がいかに困難であったかがわかり、改めて兩氏の努力に敬意を表する次第である。

隠元の語録・詩偈集・年譜類は、隠元の在世中ないし寂後間もないころに開版されており、既にかんりの年數を経過しているので、紙魚の害がようやく目だってきている。このまま放置すると、やがて判讀し難くなる恐れがある。

現に本全集に載せるため撮影した版本の中にも、紙魚の害を考慮して同種の版本を二部使用せざるを得ないものがあった。今のうちに影印本にして後世に残すことが望ましいが、假りに版本一枚分二頁として、自分の目に觸れた版本を全部影印本にすると、一萬頁を超える浩漭なものになる。本全集は内容の重複を避けたので、附録を含めて約半分の五千五百頁ほどになっている。底本の間に底本以外のものを補足挿入したり、底本中のものでも既出のものは削除しているので、版本そのままの形はくずれているが、内容の上からいうと、版本の約半分が影印本として後世に残ることになる。本全集を編集して、自ら満足しているのはこの點である。

本全集には、黃檗文華殿及び愛知縣常滑市龍雲寺の所藏本を中心として、三重縣孤野町見性寺・東京都池袋洞雲寺・國立公文書館・駒澤大學圖書館の所藏本が撮影掲載されている(詳細は解題にゆずる)。撮影掲載を許可していただいた以上の諸寺院・公文書館・圖書館に對しては勿論のこと、出版の口火を切っていただいた野口先生、出版を快諾され出版に骨を折られた開明書院の田中孝雄氏・佐藤克彦氏、背後から御支援下さった浅井善應・村瀬玄妙・山本千秋・玉川泰客の四師並びに林先生・東京都黃檗宗寺院の方々、種々協力していただいた大槻先生、何かと御智恵を拜措した玉村竹二氏・梅野茂先生に對しても、深甚なる感謝の意を表する。

本全集の編集に使用した語録類のことは、すべて「解題」に説明しておくが、自分の目に觸れないものがまだ若干あることと思う。「解題」に洩れている語録類とその所在について御指教いただき、後年増補する機会が得られれば幸いである。

最後に私事にわたるが、昭和二十年代の後半からはそぼそと續けてきた自分の黄檗宗関係の調査は、半ば道樂的なものである。この道樂的な調査に對して終始協力を惜まなかった妻の美子が、本全集の出版を喜んでいるのを見て、妻に對し若干報いることができたのかと思っている次第である。

昭和五十四年初秋

平久保章